

# 高等学校英語科における「聞き手の理解」に焦点を置いた発話活動の実践

学籍番号 219309

氏名 野田 真梧

主指導教員 篠崎 文哉

副指導教員 加賀田 哲也

## 1. 背景

文部科学省の「GIGAスクール構想」の推進の陰で、生徒のface to faceでのコミュニケーション能力の育成がおろそかになり、人間教育が不十分になるという懸念がなされている。

英語をはじめとした外国語教育に関しても、英語を単なるコミュニケーションの手段としてだけでなく、コミュニケーションの背景にある、人間性を高める教育としての必要性も高まっていることがうかがえる。ただ、人間性そのものが含む意味の範囲が広いいため、本研究で扱う人間性の育成の視点を明確にする必要がある。

そこで、まず、生徒の実態を把握することにあわせて多角的に育成すべき「人間性」のうちの部分に焦点を当てるかを検討することを目的に授業観察・授業実践を行い、そこから得られた知見を元に授業を具体的に計画することにした。

## 2. 基本学校実習 I・IIでの授業観察・授業実践

基本学校実習 I では、実習校の生徒の実態を把握するために、EEI（英語表現 I）の授業及び ECI（コミュニケーション英語 I）で授業観察と授業実践を行った。授業実践後のアンケートから、授業形態に関してグループ学習を好む生徒が全体の 7 割を超えることが分かった。

基本学校実習 II では主にジグソー法やプレゼンテーションといった協同学習の授業を「協同学習の生徒同士の発言」「プレゼンテーションを行う上での話し手・聞き手側の態度」等の視点から観察した。その結果、プレゼンテーション活動において聴衆と質疑応答を行う力に課題があることが分かり、コミュニケーションの観点から聞き手に焦点を当てた指導がさらに必要であると考察した。

## 3. 研究の目的と理論

### 3.1. 基本学校実習 I・IIを踏まえた研究目的

基本学校実習 I・II を踏まえ、傾聴力を持ちコミュニケーションができる生徒の育成を目標と

した授業モデルの開発に着手した。実際、穂田（2008）は日本の教育の「きく」力に対する軽視を指摘している。「きく」については「聞く」「聴く」「訊く」の3つがあり、玉井（2011）は、教育相談において、「聴く」は「傾聴」と表現することが多いことを指摘している。また、Rogers の傾聴の基礎となる人間観及び三浦他（2021）の人間性心理学の特徴から、傾聴は人間性と噛み合う部分があると言える。しかし、人間性の育成を授業の中心に据えた高等学校英語科授業の実践報告は不足しており、活動を含む授業方法に議論の余地がある。

### 3.2.理論的枠組み

縫部（1985）は、三浦（2014）が挙げる人間形成的英語教育の目標として、①認知的目標、②情意的目標、③相互作用的目标の3つがあり、石井ほか（2022）は、①認知的目標を達成するために Communicative な活動が多用されており人間形成的な（Humanistic な）活動においては、これに②情意的目標と③相互作用的目标の達成を目指していくと示している。また、石井（2021）は Communicative な活動から Humanistic な活動に昇華させる鍵として意見や考え方の違いである価値観偏差を挙げ、山本（2017）は活動例として”Big Question”を挙げている。

傾聴については、相手の立場に立って理解しようとして聞くという積極的傾聴を理想とし、育成手法として横須賀（2001）の聞き手としてのコミュニケーション・ストラテジー（CS）の観点からの考察を参考にした。

## 4. 発展課題実習 I・II における授業の概要

「話し合いの中で、傾聴力を持ちコミュニケーションができる生徒」の育成を目標に、発展課題実習 I では Discussion 等の言語活動を Humanistic な授業作りの枠組みにあわせて取り入れ、さらに、CS の指導を落とし込んだ授業実践を行った。また、「聞く」ことに関する工夫（姿勢）を調査するためのアンケートを行い、KH Coder を用いてテキストマイニングを実施した。分析の結果、相手意識を持ち「聴く」ことは既にできている一方で、生徒の知っている CS の表現量がまだ乏しく指導の余地があると考察した。

発展課題実習 II では、実習校使用の教科書に CS の指導を取り込んだ授業実践を行った。また、事前・事後に CS に関するリスニング及びアンケートを行い、傾聴力にどのような変容があるかを検討し、最終目標である授業モデルの提案に活用することとした。

## 5. 学校実習を通しての成果と今後の展望

授業時間の都合上、CS を取り入れた指導は一部に留まったが、CS を取り入れることにより、積極的傾聴の姿勢になるという可能性が示唆された。一方、各 CS 表現の使用場面の設定を明確にする必要性も明らかとなった。さらに、CS 単体の理解度が高まったとしても、コミュニケーション活動のテーマが抽象的であったり難易度が高かったりすると、CS の使用以前に対話が日本語になってしまうことが観察されたため、CS を効果的に使用できるようになるために、総合的な観点で授業を組み立て、繰り返し実践していく必要がある。